

透过日本对华政策解读日本民族心理的矛盾性

楊詩書

(内モンゴル外国語学院, 内モンゴルフフホト010021)

要旨: 中日両国は長い友好交流の歴史がある。長年の衝突及び協力のすり合わせを経てきた両国は、共に相互依存という両国関係の本質を認識しているはずだが、残念ながら、長くスムーズに進むここがない。本論文はこれを日本民族心理の矛盾性によることだという認識から、まず、日本民族心理及びその矛盾性についての文献を大量に読んで先行研究を総括した。次に日本戦後のいくつかの時期の対中国政策に着目し、具体的な例を挙げて、日本民族心理の矛盾性が如何に日本各時期の対中国政策を左右してきたかを分析した。最後に、これからこういう民族を相手に付き合っていく上で取るべき姿勢を提示した。

キーワード: 日本民族心理; 矛盾性; 対中国政策; 中日外交

分類番号を图中に示す: k247 **文書識別コード:** A

民族心理とはゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルによって提唱された哲学の概念。これは歴史上で人類が一定の発展段階において形成された、各民族固有の心理的な原理のことを言う。この民族心理が決まってくるのは、自然などのような敵意を持って自身に対抗してくる存在が現れた時である。このような脅威が現れた時には人類は態度を決定することを迫られるわけであるが、このような時にどのような態度を示してきたかが民族心理として定着することになる。そして一旦形成された民族心理がその後この民族がどのような運命に遭遇するかを定めることになる。

日本民族心理とは日本民族が長い歴史の中で積み重ねた「民族意識、民族文化、民族性格、民族信仰、民族習俗、民族宗教、民族価値観と価値追求」などの共通した特質で、日本民族伝統文化の中で民族の生存及び発展に影響を与える精髓的な思想で、日本民族の内在心理及び心理モデルのことである。日本民族心理は本土の文化をもとに、長期にわたって外来文化と融合するう

ちに形作られたものである。そして、そういう独特な形成過程が日本民族心理の種々の表面的な矛盾を性格づけた。それを明らかにすることは両国関係を処理する上でも、また民間交流を推進する上でも有意義なことである。そして、日本民族と日本人の長期以来歴史問題などの面を取ってきた態度ももっと容易に理解することができるだろう。いつも注目された日本民族心理の中には、危機意識、集団意識、武士意識、勤勉意識、矛盾心理などが含まれる。同じ文化類型に属する人々は似たような文化心理を持っているはずだが、日本大和民族は東洋文化と違って、その矛盾性は取り分け目立つ。分析してみれば、その矛盾性はいかに理解しにくいかが分かる。したがって、両国間の関係の正しい処理及び民衆間の理解を深めるには日本民族心理の矛盾性を深く理解する必要がある。また、これは歴史問題などの面で日本民族が取ってきた態度をより良く理解することにもつながる。

日本民族心理については、多くの学者たちはすでに様々な角度や形で大量な先行研究をしてきた。本論文は日本各時期の政権の対中国政策という角度から日本民族心理の矛盾性を研究したいと思う。日本研究の領域で日本民族心理の矛盾性についてが一番有名な研究成果は、アメリカの作家であるルース・ベネディクトの著作「菊と刀」であろう。中国国内の研究成果としては戴季陶の「日本論」が有名である。付清松の「日本民族心理矛盾外觀の形成要因探求（日本民族心理矛盾外觀的成因探微）」は歴史発展の角度から日本民族の外在性と内在性、伝統性と現在性及び団体性と個人性及びその原因をも探求した。その他、武漢科術大学の賀傑嬋の「桜に見る日本の民族心理（从櫻花透射日本的民族心理）」は桜の角度から日本民族の武士道心理と美意識を探求した。

日本民族心理を探求し、その矛盾した民族心理に支配された日本人の行動を理解するために、筆者は日本の対中国政策を整理することを通して、この日本民族心理の矛盾性を総括してみたい。

一、日本民族心理

（一）日本民族心理の概況

日本民族心理の研究はいつも日本を理解することを目的とする世界各国の注目する課題である。今日、それについて学界で発表された研究成果は、汗牛充棟と言っても言い過ぎではないぐらいである。しかし、一般の人の理解する日本人のイメージは日本人学者による自画像に過ぎなく、或いはアメリカ人からのイメージである。アメリカより日本と一衣帯水の隣邦である中国ではもっと研究が出せるはずだと思う。日本国内出版の著作としては日本通と呼ばれた小泉八雲の『日本と日本人』と新渡戸稲造の著した『武士道』がある。第二次世界大戦の末期、アメリカは日本人を研究する専門組織を設立し、そして、その研究成果の『菊と刀』を出した。作者は日本人の矛盾した性格を「ところがこれらすべての矛盾が、日本に関する書物の縦糸と横糸になるのである、それらはいずれも真実である。刀も菊もととにもひとつの絵の部分である。日本人は最高度に、喧嘩好きであるとともにおとなしく軍国主義的であるとともに耽美であり、不遜であるとともに礼儀正しく、頑固であるとともに順応性に富み、順応であるとともにうるさくこづき回されることを憤り、忠実であるとともに不忠実であり、勇敢であるとともに臆病であり、保守であるとともに新しいものを喜んで迎え入れる。彼らは自分の行動を他人がどう思うだろうか、ということをおそろしく気かけると同時に、他人に自分の不行跡が知られないときには罪の誘惑に負かされる。彼らの兵士は徹底的に訓練されるが、しかしまた反抗的である。」というふうに指摘した。そして、中国で有名なのは蒋百里による『日本人』、戴季陶による『日本論』とずっと後の中国大陸の韓立紅による『日本文化概論』などがある。

（二）日本民族心理の形成

どの民族心理の形成もその民族自身の歴史発展及び社会背景と切り離すことができないと思われる。日本民族心理の形成には二つの要因が考えられる。一つは地理的環境、社会の構成、社会制度などで構成された物理面の強制的要因である。もう一つは心理面の要因で、おもに文化芸術、風俗習慣などが含まれる。

二、日本民族心理の矛盾性

（一）日本民族矛盾性の先行研究

日本民族心理の矛盾性は東洋でも世界でも珍しい。一番有名なのはアメリカのルース・ベネディクトが日本の民族心理を菊と刀という二つの具体的な事物に例えた。「菊」は日本王室の定紋であり、「刀」は武士道文化の象徴である。著者はこの本で日本人の本質を探し出し、つまりその矛盾性を析した。

国内の論文としては、傅清松の「日本民族心理矛盾外観の形成要因探求」は歴史進行の中で日本民族の外在性と内在性、伝統性と現在性及び集団性と個人性などを分析し、その成因をも探究した。祝大鳴は『日本人の二重性格——知っているようで知らない民族』で日本人の拡大と縮小、開放と保守、傲慢と劣等感、勤勉と享楽など矛盾統一の独特の民族性格及び思考パターンを研究し、客観的に日本を理解するのに役立つ見解を出した。馬紅は『日本民族二重性格の特徴についての分析』で「文化は人類の行動に繋がり、民族の性格を形成するのである。」「日本の歴史と文化が発展する中、いろんな矛盾した現象が出たが、巧みに統一し、特色のある日本文化ができた。」などを指摘した。

また、中国国内の学者は数多くの著作を出して、日本文化の多元性や地域の極限性や自然災害の頻繁性から日本民族の矛盾性を研究してみた。本文は日本の外交辞令や外交姿勢及び傾向の不安定性などから日本民族心理の矛盾性を考察しようと思う。確実に日本の外交面における矛盾性を受け止めるのは、我が国の対日本政策を設定し、中日関係を処理する上で必要なことだと思う。日本民族心理の矛盾を孕む性格が日本の外交政策の曖昧さによく現れる。多くの問題において、日本の態度は矛盾している。欧米国の場合は言動と契約は相対的に一致し、「はい」と「いいえ」のどちらかを選ぶが、日本の場合は、その矛盾的性格のため本当の意図や思いは読みにくい。特に中国に対する態度にそれがはっきり現れているのである。中国を牽制しようとする一方で援助もし、中国の強くなるのを懸念する一方で、強くなってほしいという心理もあるようである。

（二）民族心理矛盾性の形成原因

なぜ日本人の矛盾した性格は他の民族より一層著しいのだろうか。一言

で言うと、それは主に日本人の實用主義的理念によることである。そして、要因が二つ考えられる。一つは自国の内在的特性である。前に述べたように、日本の独特な地理環境の影響である。日本は小さい島国で、面積は中国の雲南省に相当すると言われる。資源は相対的に限られている。そして、プレートとの隣接した部分に位置するので、火山、地震、火事などの自然災害が多い。そのため、危機感、不安定感、神経質、猜疑などの民族心理が形成されてしまうのである。例えば、日本は外来の文化に惹かれながら、自国文化が犯されるのではないかという危機意識で外来文化を拒否しながら吸収してしまう状態になる。その心理はまた団体意識、独立独行などの意識を生んだのである。日本民族は感性が相対的に弱く、理性が相対的に強いから、日本の矛盾した性格が常に国家の利益に偏る傾向を示すのである。そして、心理面で侵略性や占有欲に満ちたものになりがちである。もう一つは周辺国からの日本民族への影響である。日本は大化の改新の後、中国の唐の文化を盛んに吸収し、そして、明治維新のあと、欧米文化を勢いよく取り入れたのである。明治維新まではずっと農業国家で自信のなかった日本は欧米の強大さを意識し、それを学び始め、ようやく自信を築いた。このような多元な文化は日本民族の矛盾心理につながったのだろう。

（三）日本の対中国政策に見る日本民族心理の矛盾性

日本民族心理の矛盾性を研究する角度はいろいろあるが、文学的な角度から日本民族心理の矛盾性を探求する研究が多い。例えば『「矛盾の産物——「豊饒の海」と作者三島由紀夫」はその一つであるが、この論文は作者をめぐる争議からその作品「豊饒の海」の矛盾性を探求した。また「民族主義の矛盾性から——戦後日本文学における戦争反省主題についての分析」という論文は、戦後日本文学の戦争反省主題が複雑性、矛盾性という特徴を持ち、戦争の残酷さ及び平和への希望を表現する積極的な思想がある一方、「日本被害論」及び「戦敗反対」を宣揚したような批判するべき思想もあると指摘した。中国の学者たちは違う角度から日本民族矛盾性の各方面を研究したが、本文は日本の対中国政策に見る日本民族心理の矛盾性を総括してみたいと思う。

ここは二つの部分に分けて考察したいと思う。一つ目は日本戦後の対中国政策である。第二次世界大戦は日本の敗戦に終わった。日本はそれまでの自国のイメージを覆されたような時代を迎えた。米軍に占領された日本は米国に追随する政策を取っていたから、対中国政策も米国の後について、中国を敵視していたのである。そういうこともあって、日本は経済の力を築きあげた。しかし、七十年代になると、米国の対中国政策の変化及び日本自国実力の進展によって、日本の対中国政策も変わっていった。それは中日国交回復期、小泉政権期及び安倍政権期の三つの時期の政策に典型的に現れる。二つ目は日本の対中国政策に見る日本民族心理の矛盾性である。この部分では主に上述の三つの時期から日本民族の矛盾性を見る。

三、日本戦後の対中国政策

(一) 中日国交正常化時期の対中国政策及びその矛盾性

中日両国は共に東アジアの大国であり、しかも隣国である。共に世界で重要な影響力を持っているから、日本の対中国政策は必ず中日関係に影響を与えることになる。1970年の中米関係の回復は日本外交の独立自主に空間を提供した。1972年中日国交が実現されてから、中日関係は外交面で大きな一歩を果たしたが、日本民族の矛盾心理の影響で、その後の中日関係は曲折した道を辿らなければならなかった。

両国は歴史上の敏感問題については双方とも控えめに処理し、特に改革开放以来30年にわたって、中日両国の交流は様々な領域で飛躍的な発展を遂げた。歴史上ハネムーンと呼ばれる時期があった。70年代末から80年代の初頭にかけて、中日間の貿易が頻繁になり、1978年の「中日平和友好条約」及び1979年の中国への500億円の信用販売の実現は、一層日本の対中国外交と対米外交の調和の採れた取り扱いを促進した。あるデータによると、1985年、日本は米国に次いで、中国の第二位の輸入国になった。それと同時に、中国は日本の第一位の輸入国になった。双方は政治、経済、外交で大きい発展を果たしたのである。

それとともに、矛盾心理の影響で、日本は米国と同盟を結んで、中国の発展を抑制しようとする政策を取り、中国脅威論を言い出した。そして、九

十年代に、日本では歴史評価を覆す嵐が吹き出した。日本侵華戦争が侵略戦争であるかどうかという問題、対中国賠償問題‘日本首相の橋本龍太郎及びその後継者の小泉純一郎が相次いで靖国神社に参拝したこと、日本政府が歴史教科書を変造し、侵略戦争を公に否認したことなどである。

(二) 小泉政権期の対中国政策及びその矛盾性

二十一世紀になると、国際情勢が根本的に変わった。日本は経済実力が一層強まったので、外交政策も調整した。唯一変わらないのは民族心理の盾性である。世界に奉仕し、政治大国になろうと宣言する一方で自国の犯した罪行を承認しない。一方では、米国に「NO」を言い出しながら、日米同盟を強化した。他方では、「脱米入亜」、「脱欧入亜」などを呼び回りながら、アジアの隣国に強硬な態度を取った。

2001年に発足した後、小泉内閣は対内外政策を大幅に改革した。今まで政治チビと呼ばれる日本の印象を変えるために、特に中国に強い政策を取った。その矛盾性は次のいくつかの面に現れる。経済面においては、まず小泉は施政演説の中で日中関係は一番重要な両国間関係であると強調したし、中国がWTOに参加したあと、それは日中両国の共同発展に積極的な影響があるとコメントした。

小泉内閣は中国の発展を利用しようと思い、中日の貿易を促したのである。しかし、次第に中国が強くなると、中国を牽制するため、中国に国際経済準則を厳しく守るように要求し、欧州連合のような地域経済統一機構を結成すべきだなどと提言した。中国の強大化を抑制するつもりであった。政治上、歴代の日本首相より、小泉は中国への防備と敵視の姿勢で中日歴史問題を処理していた。両国人民の今までの努力と態度を無視し、六回にもわたって靖国神社を参拝し、台湾問題においても中国のベースラインに触れ、中日関係を損害した。

即ち、小泉内閣は経済面において中国の経済発展を機に、中日関係の重要性を意識したが、中国の経済実力の発展及び影響力の上昇などで、政治面において中国からの反対を無視し、靖国神社に参拝し、日米同盟で中国の台頭を抑制し、経済上国際規則で中国を抑制し、最後に長年の平和友好を破っ

てしまった。小泉内閣は矛盾している間、自国の発展にも中日関係にも損害を加えた。

（三）安倍政権期の対中国政策及びその矛盾性

近年来中日関係に重大な影響を与えているのは安倍内閣である。安倍は三回にわたって内閣総理大臣に就任した。2006年9月から2007年9月までの第一次改造内閣と2012年12月から現在までの第二次と第三次改造内閣である。ここで第一次安倍改造内閣時期を第一次安倍政権期とし、2012年12月以降を第二次安倍政権期とする。2007年以來、中国の総合実力と地位の上昇で、中米関係は緩和し、中日は戦略互惠関係を確立した。安倍の初登場は「共産主義反対」の政治理念を無視し身を下ろし、「戦略互惠」の主張を提出し、中日間の氷を溶かした。中国と「戦略互惠関係」を提出したが、同時に中国包囲などの為に日米澳印間の「価値観同盟」への協力を促進した。この時期、中日両国の努力で外交は相対的に好調だった。

しかし、2006年に安倍内閣が発足した後の第六回中日戦略対話で、両国は「中日双方は、両国関係を影響する政治の障害の克服と、両国の友好協力関係の健全な発展の促進で一致した。」という内部承諾を達成したが、日本メディアが報道した内容は「中国政府駐日大使館の公使者は安倍首相政権中、神社に参拝しないことが確認されていた。」になっていた。そして、2012年から日本右翼勢力が動き出し、とりわけ安倍政権時期、尖閣諸島をめぐる問題が激化し、緊張情勢の中中日関係が冷凍状態になった。

第二次安倍改造内閣が発足してからは、安倍首相は前の態度を一変し、強硬な姿勢で中日間の紛争を処理するようになった。安倍首相は第一次政権期の友好政策を継ぐのではなく、強硬な姿勢を取った。米日間の同盟関係を強調し、尖閣諸島問題と靖国神社参拝問題でも右翼的な態度を示した。日本の侵略を表明した「村山談話」への否定も、靖国神社への参拝も、また、「自由憲法」の制定、「国防軍」創設の提案、「東京裁判」に対する態度表明、軍服姿で「主権回復の日」に演出したショーなど、すべて中日関係の修復に損害を与えた。その間、中日関係の現実を面し、安倍氏は一方、中日首脳会談の意見を出し、首相の特使と政治家を派遣したり、北京を訪問したり、

双方関係の回復を望んでいるような意思も示した。もう一方、何の実質に触れるような行動も取っていなかったし、傲慢で無責任に発言した。

総合的にみると、日本は国交回復した後、対中国政策への調整は下がったあと上がる情勢であり、鐘のように揺れていて発展していく。この情勢は21世紀に入ってから一層明らかになった。日本は中国に超越されるプレッシャーを感じながら、中国との安定した経済関係を続けて、中国で米国と駆け引きをしようとするのである。中国の発展に対し、いつも日本の態度は動揺している。

（四）日本外交政策の矛盾性の分析

外交に影響を与える要因は様々で、国内の学者たちは政治、経済、安全などの方面からそれを分析した。

実は、日本の対中国政策に影響を与えた要因が三つあると思う。一つ目は民族主義である。「民族優秀論」や「至上主義」の日本民族主義は外交に影響を与える。自然地理の島国の特徴や人文地理の限界地域には日本人はコンプレックスを抱いている。それを乗り越えるためには、自国が神国であり、日本人が神の子孫であると強調してきたが、そこで生まれた自負は日本民族心理の起源や内容になる。もう一つは首相の政治理念や家庭背景などの個人的要因である。安倍は政権につく前から、その祖父の岸信介の深い影響で活動していた。首相になってから、その影響がもっと顕然になった。三つ目はアメリカの影響である。周知の通り、日本はいつも米国の後についている。しかし、政

治地位を取り戻したい日本はある程度、戦略上、中国などのアジア国家に頼り、東アジア国家に援助政策を実施した。

四、中日外交の未来

一衣帯水の中日両国は地理的な距離的には近いが、心が離れている。この局面になったのは、現在の外交状況から見れば、日本民族心理の矛盾性が重要な要因になる。前に分析したように、日本の対中国政策に通じて、その民族の矛盾性が表現されている。その矛盾性は日本の対外政策、中日外交の現状及び未来に大きな影響を与えるに違いない。中日外交の発展を妨げるの

は釣魚島（日本名尖閣諸島）をめぐる領土問題、第二次世界大戦(特にそのうちの中日戦争<中国で抗日戦争>)をめぐる歴史認識問題などである。それらの問題と現象は少なからず日本民族の矛盾した心理が影響している状況である。そして、この矛盾した心理が存在する限り、これらの問題は容易に解決できないだけでなく、両国関係の実質的改善もままならないだろう。「己を知り、敵を知れば、百戦危うからず」と言われる通り、この矛盾を孕んでいる日本民族心理の全体像を把握してこそ、日本の行動に応じて、有効な対策を取ることが出来るだろう。中国としては、被害者としての屈辱を銘記すると同時に、客観的に日本人の民族心理を把握し、そしてそれを利用して、余裕のある行動を取ることが大切である。

それに、長い目で見ると、世界は友好と協力が趨勢である。この流れで、中日の関係を推進するためには、双方からの努力や妥協が必要である。日本としては、中国を「脅威」或いは「敵」と認識するのは、この時代に反する行動である。歴史を正視し、戦争への反省を行動に移すべきである。二十一世紀という新しい時代の到来をきっかけで日本への認識を新しくするとともに、その行動をより確実に把握し、対応すべきである。

本稿は日本の対中国政策に現れた日本民族心理の矛盾性を中心に論じてみた。日本民族心理という文化現象が日本政府の対外政策に潜在的な影響力を持っているという発想から、日本民族心理の矛盾性を研究することは目下の中日関係研究で重要な一環だという結論を得た。

中日国交正常化以来、44年の歳月が過ぎた。これまでの中日関係を振り返ってみると、両国の経済協力が時代とともに深まると同時に、歴史認識や領土問題をめぐる争いが絶えず存在していると言える。安定した経済発展を達成するためには、中日両国の協調と努力が不可欠である。中日両国の協力は中日二大隣国が速やかに相互信頼および正常な外交関係を回復し、各方面の交流と協力を深化していくのに欠かせないことである。そのためには日本民族心理の矛盾性を分析し、理解し、その行動を理解し、把握することこそが、中国学者が最も注目すべきことであろう。

本稿は三つの時期から、日本の対中国政策及びその矛盾性を総括した。

中日関係の未来を展望し、両国関係の改善に役立ちたいと努力したが、時間が限られているため、不足点が多くあるに違いない。いずれもう一度検討したいと思う。

参考文献

- [1] 安倍晋三. 「新しい国へ」「政権構想」発表[J]. 文藝春秋. 2013.
- [2] 日本貿易振興機構. 総額は3年ぶりに減少、対中赤字は初めて400億ドルを突破——2012年の日中貿易[R]. 2013.
- [3] ルース・ベネディクト. 長谷川松治訳. 菊と刀[M]. 講談社学術文庫. 1708.
- [4] 若月秀和. 全方位外交の時代: 冷戦変容期の日本とアジア[J]. 東京日経評論社. 2006.
- [5] 史桂芳. 战后中日关系[M]. 当代世界出版社. 2005.
- [6] 戴季陶. 日本论[M]. 北京九州出版社. 2005.
- [7] 东京外务省. 日本外交文书[M]. 外务省. 2000.
- [8] 大卫松本. 解读日本人[M]. 中国水利水电出版社. 2004.
- [9] 井上清. 日本历史[M]. 天津人民出版社. 1974.
- [10] 深见东州. 走进日本[M]. 文化艺术出版社. 2004.

透过日本对华政策解读日本民族心理的矛盾性

杨诗书

(内蒙古大学 外国语学院, 内蒙古 呼和浩特 010021)

摘要: 中日两国的友好交往有悠久的历史。经过多年的冲突以及合作的磨合, 两国本应都更清楚地认识到两国是相互依存的关系这一本质, 然而, 遗憾的是, 两国关系却没并没有顺利进展。本论文将其因归结于日本民族心理矛盾并在这一认识下, 首先阅览了大量有关日本民族心理及其矛盾性的文献, 并概括了其先行研究。之后着眼于日本战后几个时期的对华政策, 列举具体的事例, 分析了日本民族心理的矛盾性是如何左右日本的对华政策。最后表达了今后与这样

的民族交往中应采取的态度。

关键词：日本民族心理 矛盾性 对华政策 中日外交

中图分类号：k247 **文献标识码：**A

Interpretation of Japan Contradictions of national psychology through Japan's China policy

YANG Shi-shu

(Foreign Languages College, Inner Mongolia University, Hohhot 010021)

Abstract: China and Japan have a long history of friendship exchange. Both countries that have undergone long-term conflict and cooperation have recognized the essence of mutual dependence of bilateral relations, but it didn't go smoothly. From the cognition that results from contradiction of Japanese ethnic psychology, this paper firstly summarizes the preceding research by reading a large amount of literature on it. Next, paying attention to the policies of China among several periods after the Second World War, we analyze how the contradiction of Japanese ethnic psychology has influenced the policies of China with concrete examples. Finally, some suggestions about how to get along with the Japanese nation in the future are brought forward.

Key words: Japanese national psychology; Contradictions; Japan policy China

[收稿日期]：2019-04-15；

[作者简介]：杨诗书（1994-），女，汉族，包头市达茂旗人。内蒙古大学外国语学院2018级硕士研究生，研究方向为中日文化研究。